

漢語西寧方言の形成過程について

川澄哲也

(On the Formative Process of the Xining Dialect of Chinese)

Tetsuya KAWASUMI

(pp. 185-201)

Contribution to the Studies for Eurasian Languages series vol.15

『チュルク諸語における固有と外来に関する総合的調査研究』
Native and Loan in Turkic Languages

九州大学人文科学研究院言語学研究室 Department of Linguistics, Graduate School of
Kyushu University / ユーラシア言語研究コンソーシアム The Consortium for Studies of
Eurasian Languages

2009 March

ISBN 978-4-903875-18-7

漢語西寧方言の形成過程について※

川澄 哲也

(神戸市外国語大学)

tetsuya.kawasumi@gmail.com

0. 序

本稿では、中華人民共和国青海省の西寧市で話されている漢語方言(以下「西寧方言」)が形成された過程について考察を行う。

右に掲げた地図^{*1}は、西寧を含む青海省東部地域の行政区画である。様々な民族の名称を冠した自治県、自治州があることからわかるように、この地域には漢族のほかに各種の少数民族が居住している。西寧近辺に範囲を絞ると、回族、土族、チベット(藏)族が多く暮らしている。このうち回族は西寧方言を用いるが、土族はモンゴル系言語の土族語を、チベット族はチベット語アムド方言(以下「チベット語」)を話す。



* 本稿は、2009年に京都大学文学研究科に提出した博士論文「漢語西寧方言の研究」の一部を改めたものである。

^{*1} 京都山の会出版部(1992)のp. 8, およびp. 27に挙がる地図に加筆して作成した。

このような多言語・多民族地域で話されている西寧方言は、漢語としては珍しい特徴を多く有している。代表的な例としては、次頁に挙げる各例文のようなSOV語順の使用や、3-6中に使われている、名詞に後置する格標識*²の存在を挙げる*³。西寧近辺で話されているチベット語、

*² 与格・対格は“xa”で、奪格は“sa”で、具格・共同格は“lja”で標示される。一方で、SVO語順を基本とする標準漢語では、これらの意味を表す場合、以下のような方法が用いられる。まず与格・対格については、語順(i.e. 動詞-間接目的語-直接目的語)を利用して表現する方法がある。

e.g. 我 告诉 你 一 件 事。(Wǒ gàosu nǐ yījiàn shì.)

私 告げる 君 1 [量詞] 事 「あなたに一つの事をお知らせします。」

与格的意味の場合は、各種の介詞(preposition)を用いた表現も可能である。

e.g. 他 对 我 说 了 这 件 事。(Tā duì wǒ shuōle zhè jiàn shì.)

彼 ~に 私 言う [助詞]この [量詞] 事 「彼は私にこの事を言いました。」

给 他 打 电话。(Gěi tā dǎ diànhuà.)

~に 彼 かける 電話 「彼に電話をかけなさい。」

対格的意味の場合、介詞“把 bǎ”が使われることもある。

e.g. 我 把 那 本 书 借 给 他 了。(Wǒ bǎ nà běn shū jiègěi tā le.)

私 (-を) あの [量詞] 本 貸す 与える 彼 [助詞] 「私はあの本を彼に貸した。」

奪格的意味は、介詞“从 cóng”等を用いて表現される。

e.g. 我 从 西 安 来。(Wǒ cóng Xī'ān lái.)

私 ~から 西安 来る 「私は西安から来ました。」

具格的意味の場合、介詞“用 yòng”等を用いる。

e.g. 我 用 毛 笔 写 着 字 呢。(Wǒ yòng máobǐ xiězhe zì ne.)

私 ~で 筆 書く [助詞] 字 [助詞] 「私は筆で字を書いています。」

共同格的意味を表す場合は介詞/接続詞“跟 gēn”や“和 hé”が用いられる。

e.g. 我 跟 他 一 起 去。(Wǒ gēn tā yìqǐ qù.)

私 ~と 彼 一緒に行く 「私は彼と/私と彼は 一緒に行きます。」

*³ 本稿で挙げる西寧方言のデータは、筆者が実地調査で得たデータである。調査に協力して下さったのは趙宗洲氏(1946年生、漢族、男性)。筆者のデータに関しては「音素表記」「漢字表記」「グロス」「和訳」の順に示す。但し声調については、現段階では声調素の分析が十分進んでいないため、発音された調値のまま記す。漢字表記していない要素は、標準漢語で対応する要素がない、或いは不明のものである。以下、西寧方言の分節音素を掲げる。母音：/i, u, e, o, a, ā, ā, ǎ, ǎ/. 子音：/p, p^h, t, t^h, k, k^h, ts, ts^h, tʂ, tʂ^h, tɕ, tɕ^h, f, s, z, ʂ, ʐ, ɕ, x, m, n, l, j, w, y/. 音節構造は頭子音+わたり音+音節主音/声調で構成される(音韻に関する詳細は別稿で論じる)。

或いは土族語をはじめとするアルタイ系の言語は、いずれもSOV語順を基本とし、名詞に後置する格標識を有しているので、西寧方言が来しているこれら変容に言語接触が関与していることは疑いないだろう。

- 1) tɕja²⁴ j²¹ tɕjã³³ ta²¹ j³³ tɕ^hwã⁴⁴ tɕe²¹.
 (tɕja 一件大衣穿 tɕe^{*4}.)
 彼女 1 [量詞] コート 着る [助詞]
 「彼女はコートを着ている。」
- 2) no⁴⁴ fã²¹ tɕ^hj⁴⁴ ljo²¹.
 (我 飯 吃了^{*5}.)
 私 ご飯 食べる [助詞]
 「私はご飯を食べた。」
- 3) ne²⁴ pã²¹ fw⁴⁴ no⁴⁴ t^ha⁴⁴ xa² tɕje²¹ ki⁴⁴ ljo²¹.
 (那 本书, 我 他 xa 借 给了。)
 あの [量詞] 本 私 彼 に 借りる 与える [助詞]
 「あの本は、彼に貸した。」
- 4) j⁴⁴ ɕ^hɔ̃⁴⁴ xa² kwi²¹ tsj⁴ lj³ sa²¹ tɕwi²⁴ tɕ^hw⁴⁴ le⁴⁴.
 (衣裳 xa 柜 子里 sa 拽 出来。)
 服 を 棚 中 から 引っ張り出す
 「服を棚の中から引っ張り出して。」
- 5) no⁴⁴ swã⁴⁴ xwo⁴⁴ lja³¹ ɕje⁴⁴ tɕe³¹.
 (我 swã xwo lja 写 tɕe。)
 私 毛筆 で 書く [助詞]
 「私は筆で書いている。」
- 6) no⁴⁴ lw²¹ ɕ^hɔ̃³ t^ha⁴⁴ lja³ p^hã²¹ tɕjã⁴⁴ ljo²¹.
 (我 路上 他 lja 碰 见了。)
 私 路上 彼 と 出くわす [助詞]
 「私は道で彼と出くわした。」

*4 “tɕe” は「動作の進行／状態の持続」を表す助詞である。

*5 動詞に後続し、かつ文末に現れる“了”は、「動作の完了／実現」を表すと同時に「文終止」を示す助詞である。

1. 先行研究

西寧方言が近隣言語の影響を受けて形成されたという点については、先行研究の間で意見が一致していると言ってよい。しかし「影響を与えたのはどの言語か」「どのような種類の影響を受けたか」「形成された時期はいつか」といった具体的な問題については、いずれに対しても複数の見解が提出されており、見方が分かれている。以下、それぞれの点に関する見解が明記されている先行研究を取り上げ、どのような主張が行われているのかを概観する。

1.1. 影響を与えた言語 — 「チベット語」か「アルタイ諸語」か

西寧方言の形成に影響を与えた言語については、チベット語であると考えられる研究と、アルタイ諸語(特にモンゴル系言語)と見る研究とに二分できる^{*6}。前者の例としては程(1980)^{*7}や敏(1989)を、後者の例としては贾(1991)、李克郁(1993a)、都(1995)、Dede(1999a)を挙げることができる。

1.2. 影響の種類 — 「借用」か「基層干渉」か

西寧方言を変容に導いた影響の種類に関しては、借用(borrowing)を想定する研究と基層干渉(substratum interference)^{*8}と考える研究に分かれる。前者の例としては敏(1989)、Dwyer(1992)^{*9}、都(1995)、後者の例としては李克郁(1993a)、Dede(1999a,b)がある。

^{*6} Dede(1999b: 75)は、このような見解の相違は、言語を分析した結果出てきたものというよりは、各研究者の専門分野の違いに起因するものであると見ている。

“Tibetologists who have written on the contact features found in Qīnghāi Chinese (中略) generally point to similarities between Tibetan and the Chinese dialects. Altaicists (中略) generally argue for similarities between Monguor, Mongolian, Salar, etc., and the Chinese dialects.” (Monguor=土族語, Salar=サラル[撒拉]語)

^{*7} 本稿では、程(1980)のように研究対象言語を大まかに「青海方言」と記している研究であっても、文中の言語データが西寧方言と一致すると確認できたものは取り上げている。

^{*8} Thomason and Kaufman(1988)では“interference through shift”“interference through imperfect learning”とも呼ばれている。

^{*9} Dwyer(1992)の主な考察対象は、青海省循化から甘肅省臨夏一帯で話されている漢語臨夏方言(河州話)であるが、一部に西寧方言に関する議論が含まれているので取り上げた。

1.3. 形成された時期 — 「明代」か「清代」か

西寧方言が形成された時期について明記している研究は限られているが、この点に関しても二種類の見解が提出されており、Dede(1999a)が明代を想定している一方で、李克郁(1993a)は清代と考えている。

2. 本稿の考察

第2節では、西寧方言の形成過程についての筆者の考えを述べる。2.1節では「影響を与えた言語」、2.2節では「影響の種類」について、言語学的観点から考察を行う。2.3節では西寧の歴史を検討し、西寧方言が形成された時期について推測する。

2.1. 「影響を与えた言語」に関する考察

2.1.1. 修飾語と被修飾語の語順から

先行研究では、西寧方言の語順変化に影響を与えた言語についても意見が分かれている。先行研究では主語・目的語・動詞の配列順という、アルタイ諸語とチベット語で差が出ない部分に注目していたため、西寧方言のSOV語順使用の影響元について見解が一致してこなかったと考えられる。

この点についての考察を進めるためには、アルタイ諸語とチベット語で語順の異なる表現が西寧方言ではどうなるかを調べるという方法が有効だと考える。例えば数詞や形容詞で名詞を修飾する場合、アルタイ諸語とチベット語では語順が逆になる。

◎ アルタイ諸語(実例は土族語)：数詞／形容詞 + 名詞

e.g. Guraan gambu xaloŋ ŋdzu
 3 幹部 「3人の幹部」 熱い 水 「お湯」

(照那斯图編著 1981: 66)

◎ チベット語：名詞 + 数詞／形容詞

e.g. ndzj-dok tɕək
 米 [量詞] 1 「1粒の米」 (格桑居冕・格桑央京 2002: 250)
 me-tok hkar-ro
 花 白い 「白い花」 (ibid.: 223)

西寧方言の場合は、アルタイ諸語と同じ語順を用いる。

e.g. j²¹ p^hj⁴⁴ ma⁴⁴ cǰǰ⁴⁴ cǰ²¹ fw² e²⁴
 1 [量詞] 馬 「1頭の馬」 新しい 妻 「新しい妻」

漢語は元来アルタイ諸語と同じ語順を用いるが、チベット語と漢語との間で強い接触が発生した場合、この語順は変化し得ることが報告されている。例えばチベット語カム方言と漢語の接触により成立したと言われる「倒話^{*10}」では、チベット語と同じ語順を用いる。

e.g. 我 们 家 ǰv 牛 三 个 有。 「我々の家に3頭の牛がいる。」

我々 家 に 牛 3 [量詞] 有る

布 黄 黄 di 个 有。 「(私は)黄色い布をもっている。」

布 黄 色 い 有る (意西微萨 2004: 53 [下線筆者])

また、漢語がチベット語、保安語^{*11}と接触し変容した結果の言語だと言われる「五屯話(Wutun)^{*12}」でも、Lee-Smith and Wurm(1996: 886)に次のような記述があり、チベット語と同じ語順を用いていることがわかる。

“In Wutun, (中略) numerals, and attributive adjectives generally follow the nouns as in Tibetan”

前述のとおり西寧方言では、ここで問題としている語順に関しては変容を来していない。この点から、倒話や五屯話に比べると、西寧方言のSOV語順使用については、チベット語からの影響は弱いと見るのが自然だと考えている。

*10 倒話は、青海省の南に隣接する四川省甘孜藏族自治州で話されている。SOV語順を基本とする。

*11 保安語は、青海省と甘肅省の境界付近に居住する保安族、および青海省の黄南藏族自治州に居住する土族によって話されているモンゴル系言語である。保安族はイスラム教を信仰する。彼らは元々土族と同じ民族であったが、19世紀後半、チベット仏教を信仰する他の人々(=現在の土族)から分離、移住した。その後中華人民共和国が成立すると個別の民族として認定された。

*12 五屯話は、青海省黄南藏族自治州で話されている。SOV語順を基本とする。

2.1.2. 格標識の観察から

西寧方言にはチベット語の影響が弱いという考えは、格標識に関わる各種の観察からも裏付けることができる。例えば先掲例文4にあったように、西寧方言では必要に応じて^{*13}直接目的語が後置要素“xa”で標示される。以下に二例追加する。

- 7) no⁴⁴ t^ha⁴⁴ xa³ ta⁴⁴ ljo²¹.
 (我 他 xa 打 了。)
 私 彼 を 叩く [助詞] 「私が彼を叩いた。」
- 8) no⁴⁴ xa³ t^ha⁴⁴ ta⁴⁴ ljo²¹.
 (我 xa 他 打 了。)
 私 を 彼 叩く [助詞] 「私を彼が叩いた。」

この現象は、チベット語の影響を主張する立場からは説明しづらい。チベット語は能格言語であるため、直接目的語はゼロ(絶対格)標示である^{*14}。一方、アルタイ諸語では直接目的語は対格接辞で標示され得る。

また例文5, 6で見たように、西寧方言では具格・共同格が共に“lja”で標示される。具格と共同格が同一形態素で標示されるという特徴は、チベット語とは一致しない^{*15}。一方で、いくつかのアルタイ諸語、例えば土族語や保安語、サラル語とは共通する特徴である^{*16}。

もう一つ事例を追加すると、西寧方言で奪格的意味を表す場合は、例文4にあったように“sa”を名詞に後置して示す。この要素は、Dede(1999a)に指摘があるとおおり、土族語の奪格接辞[sa]を来源とすると考えられる。

以上 2.1 節で触れた数点の言語特徴は、西寧方言にはアルタイ諸語、中でも土族語が大きな影響を与えたことを示唆している。

^{*13} “xa”は、意味解釈に影響を与えない場合、用いられないことも多い。例えば例文4中の“xa”は省略可能である。それに対し例文7, 8中の“xa”は省略できない。“xa”が無いと動作主/被動者の関係が判然としないためである。

^{*14} 前頁で触れた、チベット語カム方言の影響が強い倒話は、能格言語の性質をもち、直接目的語はゼロ標示であるという。意西微萨(2004), p. 63 参照。

^{*15} チベット語では具格的意味を表す場合は具格接辞“ka”等を、共同格的意味の場合は接続詞“ra”等を用いる。

^{*16} 具格と共同格は、土族語やサラル語では“-la”，保安語では“-gala”で標示される。

2.2. 「影響の種類」に関する考察

1.2 節で挙げた先行研究では、西寧方言が経験した影響の種類に関して、借用と見るか基層干渉と見るかで見解が分かれていた。Thomason and Kaufman(1988)は、この二つの現象では、言語への影響の現れ方が異なると述べている。借用の場合は、まず語彙借用が発生し、その後、構造レベルの借用が起こり得る、という順番になる^{*17}。一方、基層干渉の場合は、語彙への影響はそれほど大きく出ない一方、構造レベルには各種の変容が起こる、という状態になる^{*18}。

この基準を用いて西寧方言の変容を観察すると、後者の状態に一致する。西寧方言の語彙借用を扱った研究には賈(2006)があるが、賈(2006)は西寧方言では基礎語彙レベルに及ぶような強い借用は行われていないと記述している。一方で、例文1-6で示したように、文法構造には大きな変容が起きている^{*19}。これらの点から、西寧方言の形成には、借用ではなく、基層干渉が関与したと考えるのが自然である。前節の議論と合わせると、土族話者が漢語(TL/目標言語)へと言語交替(language shift)する際に、土族語の特徴を持ち込みながら漢語を習得したため、変容した西寧方言が形成されたという過程が推測できる。

2.3. 西寧方言が形成された時期

続いて 2.3 節では西寧の歴史、特に各種民族の人口^{*20}の推移について述べ、西寧方言が形成された時期を推測する。

^{*17} “Invariably, in a borrowing situation the first foreign elements to enter the borrowing language are words.” (ibid.: 37).

^{*18} “unlike borrowing, interference through imperfect learning does **not** begin with vocabulary: it begins instead with sounds and syntax, and sometimes includes morphology as well before words from the shifting group’s original language appear in the TL(target language—筆者補). Often, in fact, the TL adopts few words from the shifting speakers’ language.” (ibid.: 39).

^{*19} 音声レベルの変容としては、声調体系の簡略化を挙げることができるかも知れない。西寧方言の声調については川澄(2006)参照。

^{*20} 中国の史書に記載されているのは課税人口である場合が多く(この点は京都大学文学研究科平田昌司教授にご教示頂いた)、必ずしも当時の状況を正確に反映しているとは言えないが、一定の参考価値はあると考え、本節での考察に利用する。

2.3.1. 明代の西寧と漢族

漢族が西寧地区に本格的に居住するようになったのは、14世紀中葉、モンゴル族との争いに勝利した漢族の朱元璋が明王朝を興した後のことである^{*21}。明は塞外へ追いやったモンゴル族が再び中原に進入してくるのを防ぐために、そして辺境地域の開発をすすめるために、甘肅や青海一帯に多くの漢族を屯田兵として移住させた^{*22}。清代に書かれた『西寧府新志』によれば、西寧地区には洪武期に15,854人、永樂期に12,092人が居たとされる。

その後の明代の漢族人口の変遷に関しては、二通りの見解が存在している。一つはこの後も漢族の人口は増加したという見解で、例えば半主編(2005: 255)は『西寧府新志』の記述に基づき、16世紀中葉(嘉靖期)の西寧地区には45,613人の軍が居たと記述している。この数字は謝主編(2001: 36)にも挙がる^{*23}。もう一つの見方は、明代の移民政策は順調には進まず、漢族の人口は伸びなかったというものである。Schram(1954: 34)は16世紀後期から17世紀初めに行われた調査の記録に基づき、当時西寧地区には軍戸2,560、民戸440があったのみであると記述している。これが事実なら、明代初期に比べて軍戸の数が三分の一に減ったことになる。また民間人の移住もさほど行われなかったということになる。この二つの見解のうち、どちらが事実であるのかは現段階では不明である。但しどちらであるにせよ、後に示す筆者の見解と矛盾を来たすことはない。

2.3.2. 明代の西寧と土族・チベット族

続いては、明代の西寧における漢族以外の民族の様子を概観する。当時この地域に居住していたのは主に、歴史書に土着民と記されている人々と、

^{*21} 元代以前の様子について秦(2005: 147)では「元から明への王朝交代期、この地区(=甘肅、青海一筆者補)に住む漢族は多くなく、史書にも漢族がここで活動していたという記述は稀である。特に青海一帯は、明軍が進入する前は漢族の影も形もなかった。(筆者訳)」と記述している。

^{*22} この時移住した漢族の多くは元々、現在の南京、およびその周辺に居住していた人々であると言われている。秦(2005), p. 150 参照。

^{*23} 秦(2005: 154)や庄司(2003: 369)では15万という数字を挙げている。これは半一之「青海漢族の来源、变化和发展」(『青海民族研究』1996[3]: 5-12. 筆者未見)に挙がる数字だという。半氏は、当時240余りの堡砦が存在していた点に基づき軍戸が26,000戸あったと推測し、そこから15万人という数字を導き出したという。

チベット族である。ここでいう土着民とは、元代に辺境防衛のため派遣されたモンゴル軍兵士が、明朝に帰順した後、当地の先住民と融合し形成された人々で、現在の土族、および保安族の祖先にあたると考えられている。以下では、史書にいう土着民のことを、現在の民族名「土族」を用いて指すこととする^{*24}。

Schram(1954: 30)によれば明代、西寧周辺には 11,000 戸の土族が居住していたという。Schram(1954: 30)はここから、55,000 人という数字を推測している。また秦(2005: 154)は、漠然とした数ではあるが、明代初期、この地域には数万人の土族が居たと記述している。

その後、明代末期に至るまでの土族の人口変遷に関しては、研究者間で具体的な数値にこそ幅があるものの、基本的な方向性についての意見は一致しており、参照したすべての論考において、上述のものより大きな数字が挙げられている。李克郁(1993b: 2)では、西寧地区以外に居住する者も含めた土族の総数として 40 万、呂(2002: 468)は西寧地区に居住する者だけで 40 万、李・李(2005: 286)は西寧地区には少なくとも 20 万以上の土族がいたと推測している。以上の三研究はいずれも、清代初期に梁份という人物が記した書物『秦辺紀略』(1691 年刊)の中の同じ記述に基づいて数値を算出している^{*25}。また典拠は明らかではないが、秦(2005: 154)では 10 数万人、李臣玲(2005: 13)では 15 万という数字が挙げられている。『秦辺紀略』の記述に従えば、西寧地区の土族の数としては、李・李(2005: 286)の挙げる 20 万という数字が適当だと筆者は考えている。このように、明代において土

^{*24} 正確には「保安族」も併記するべきであるが、煩雑になるので、以下「土族」で代表させる(注 11 で述べたとおり、両民族は 19 世紀後半までは一体であった)。

^{*25} 『秦辺紀略』は清代初期に梁份が辺境地域を視察した際の記録で、当時の青海一帯の様子も報告されている。李克郁(1993b: 1-2)に挙げる『秦辺紀略』の移録から西寧周辺に分布する土族集落に関する記述のみ抜粋すれば、以下の通りになる：

- ・“西宁李土司所辖仅万人，祁土司所辖十数万人，其他土官(中略)所辖合万人。”
「西寧の李土司(“土司”に関しては注 32 参照)は僅かに一万を統轄する。祁土司は十数万人を統轄する。その他の土官は合わせて一万を統轄する。(筆者訳)」
- ・“西宁之西川口，土司两祁之所居也，东西二祁所辖之土民，各号称十万。”
「西寧の西川口には東祁土司と西祁土司が住み、彼らが統轄する土族はそれぞれ十万だという。(筆者訳)」

二文で(片方の)祁土司に関する記述が重複していると思われる。それを差し引いて計算すれば、この二文から導き出される数値は、約 22 万人となる。

族の人口は大きく増加した^{*26}。

また西寧地区には漢族と土族以外にチベット族も居住していた。陳(1997)に挙がる史料^{*27}から、人口の記録があるチベット族集落を抜き出して計算すると、明代嘉靖年間に西寧周辺に居住していたチベット族は 8,750 人、その後 17 世紀初頭(万暦年間)に至るまでに 15,950 人に増加した。

2.3.3. 清代西寧における各民族人口の変遷とその解釈

2.3.1, 2.3.2 節の記述をまとめると、明代の西寧周辺においては現在の土族が多数を占めていたということになる^{*28}。しかしこの民族勢力図は、清代になると徐々に姿を変えていく。

まず漢族の数は、清朝が行った屯田政策、あるいは自主的な移民の結果、増加の一途をたどる。18 世紀半ば(乾隆年間)の数値として王・聡主編(1992: 184)は 20 万近く、庄司(2003: 369)では 22 万余りという数字が示されている。その後、19 世紀の末には 46 万人にまで増加したという^{*29}。

またチベット族に関しても増加していたことが窺われる。陳(1997)には乾隆期のチベット族集落の様子が記述されている^{*30}。人口の記載はないものの、当時西寧周辺には少なくとも 9,962 戸が分布していたと算出できる。

^{*26} この間の土族の人口増加には、漢族やチベット族といった他民族の土族への同化が要因の一つとして働いたと考えられている。例えば秦(2005: 166-173)には、明代の青海地方では漢族の移民が土族をはじめとする当地の原住民族に同化される現象が起きていたと記述されている。

^{*27} 陳(1997), pp. 263-269.

^{*28} Dede(1999a: 9)は以下のように記述し、14-15 世紀、つまり明代前半、土族による漢語への言語交替が起きていたと推測している。

“The Monguor inhabitants of the region, under pressure to assimilate to the dominant Han culture, probably began switching to Chinese as the numbers of Han immigrants increased in the 14th and 15th century.”

筆者はこの見解に同意しない。前節までで見たように、明末清初に至るまで西寧一帯において多数派だったのは土族であり、当時は漢族が土族に同化するという方向性が一般的であったと言われている(注 26 参照)。

^{*29} 秦(2005), p. 228, 庄司(2003), p. 369. なおこれらの数値は西寧地区のみでなく、青海地方全体の漢族の数として挙げられている。

^{*30} 陳(1997), pp. 366-372.

仮に一戸5人で計算すると、当時約5万のチベット族が居たと推測される。

一方、土族については、乾隆期後半から清末の人口として4万人程度という数値が挙げられており^{*31}、明末清初と比べて大幅に数を減らしている。この時期に土族が減少した主な要因として呂(2002: 502)は「漢化」を挙げている。また、漢化を引き起こした原因については、土司制度の崩壊を挙げている。土司制度というのは明朝に起源をもつと言われる辺境異民族の統治制度で、帰順した異民族の首長に官職を与え^{*32}、現地の住民を治めさせるという制度である。この制度はその後、清朝にも引き継がれた。土司制度の存在により、西寧一帯の土族は長らく自治を保つことができたという。その結果、他民族への同化も起こらなかった。しかしのちに清朝は方針を改め、少数民族の直接支配を目指すようになる。その一環として、土司に対する管理を強め、その権限を徐々に削いでいった^{*33}。その結果、多くの土司はかつての勢力を失い、制度も有名無実化していった。清代の『西寧府新志』では18世紀半ば(乾隆年間)の西寧付近の土族の様子を次のように描いており、当時すでに土司制度が崩壊していたことがわかる。また言語交替が起きていたことも窺わせる。

- ・惟是生息蕃庶，所分田土多鬻民間，與民錯雜而居，聯姻結社，并有不習土語者。

「(土司は)ただ生息繁茂するのみで漢人に田園の多くをひさぎ、彼らと結婚し、彼らと雑居し、婚姻を結び、土族語を学ばないものもいる。」

(訳は庄司 2003: 372 による)

以上、第2節での考察より筆者は、清代に土司制度が弱体化した結果、土族が漢語へと言語交替し、その過程で当地の漢語が変容したと考えている。

^{*31} 王・聡主編(1992: 184)と李臣玲(2005: 13)は乾隆後期の人口としてそれぞれ4万余人、46,643人という数字を挙げる。呂(2002: 500)は清末の人口を4万余人とする。

^{*32} 官職を与えられた異民族の首長を「土司」と呼ぶ。

^{*33} その様子は秦(2005), pp. 191-193 に記述されている。

3. 結語

以上で述べてきた内容は、基本的に李克郁(1993a)の記述と一致するものである^{*34}が、本節では必要な補足を行う。それは、土族話話者が漢語への交替の際に習得したTL₂^{*35}としての漢語が、そのまま現在の西寧方言となっているわけではない、ということである。変容を被った西寧方言が漢族によっても用いられているという事実から、TL₂が生じた後、漢族の話す漢語(TL)との間で再度接触が起き、両者の話す漢語の特徴が“取捨選択”された結果成立した「TL₃としての漢語」が現在の西寧方言であると見なければならない。

以上の議論に基づいて本稿では、西寧方言の形成過程について次のように結論付ける。

^{*34} 但し以下の引用からもわかるように李克郁(1993a: 24, 46)は記述が非常に簡潔であるので、本稿では言語学的、および歴史学的議論を補った。

“300年前、清の梁份が甘肅、青海の境を巡視した際、西寧周辺には多くの土族がおり、強大な勢力を保っていた。ならば、300年後の今日、なぜ西寧の周囲に土族はいないのか？ 彼らはどこへ行ったのか？ 彼らはすでに漢族の中に融合したに違いない。今日の青海漢語の中の各種の独特の言語成分は、土族が漢語に持ち込んだ土族語の成分に違いない。もしそうであるなら、青海漢語の各種現象は、基層(語の影響に帰せられる一筆補)現象ということになる”(筆者訳)

^{*35} “TL₂” “TL₃” という用語に関しては以下を参照：“The process through which interference features are introduced by a group of learners into a second language – a target language – has two or three components, depending on whether or not the learners are integrated linguistically into the target-language speech community or not. First, learners carry over some features of their native language into their version of the TL, which can be called TL₂. Second, they may fail (or refuse) to learn some TL features, especially marked features, and these learners’ errors also form part of the TL₂. If the shifting group is not integrated into the original TL speech community, so that (中略) its members remain as a separate ethnic or even national group, then TL₂ becomes fixed as the group’s final version of the TL. But if the shifting group is integrated into the original TL-speaking community, so that TL₁ speakers form one speech community with TL₂ speakers, the linguistic result will be an amalgam of the two, a TL₃, because TL₁ speakers will borrow only some of the features of the shifting group’s TL₂. In other words, TL₂ speakers and TL₁ speakers will ‘negotiate’ a shared version of the TL and that will become the entire community’s language.” (Thomason 2001: 75).

・18世紀以降^{*36}、土族が漢語(TL)へ言語交替をする際、母語の特徴を持ち込みながら漢語(TL₂)を習得した。その後、土族との接触の中で漢族はTL₂の特徴を自身が話す漢語(TL)に部分的に受容した。その結果形成されたのが西寧方言(TL₃)である。

Dede(1999a)によれば、近年の標準漢語普及の影響で、西寧方言の文法構造は標準漢語と収斂する方向に向かっているという。言語接触研究を進める上で貴重な事例といえる西寧方言のデータ収集を急がねばならないと考えている。

参考文献

- 陈光国(Chén Guāngguó) (1997) 『青海藏族史』 西宁: 青海民族出版社。
程祥徽(Chéng Xiánghuī) (1980) 「青海口语语法散论」 『中国语文』 1980(2): 142-149。
Dede, Keith. (1999a) An Ablative Postposition in the Xining Dialect. *Language Variation and Change* 11: 1-17.
----- (1999b) *Language Contact, Variation and Change: The Locative in Xining, Qinghai*. Seattle: University of Washington dissertation.
都兴宙(Dū Xīngzhòu) (1995) 「论西宁话里的虚词“lia”」 『青海民族学院学报(社会科学版)』 1995(4): 56-61。
Dwyer, Arienne M. (1992) Altaic Elements in the Linxia Dialect: Contact Induced Change on the Yellow River Plateau. *Journal of Chinese Linguistics* 1: 160-179。
格桑居冕(GésāngJūmiǎn)・格桑央京(GésāngYāngjīng) (2002) 『藏语方言概论』 北京: 民族出版社。

*36 より具体的な時期を割り出す作業は今後の課題としたい。ここでは見通しのみ記しておく。土族が変容を来した漢語(TL₂)を生んだ事実から、当時の土族には漢語(TL)と接する機会が十分にはなかったことがわかる。つまり漢族に対して土族が数的には優位であったと考える必要がある。また上で述べたように筆者は、土族が生んだTL₂としての漢語の特徴を漢族が(部分的に)受容したとも考えている。このような事態が起こるためには、やはり人口で土族が漢族を上回っていたと考えなければならない(Thomason and Kaufman 1988: 43 参照)。つまり西寧方言が形成されたのは、漢族の移入が本格化し、現地の優勢民族になるより早い時期であると推測できる。今後、西寧における漢族移入に関する歴史研究が進めば、西寧方言形成のより具体的な時期が確定できるかも知れない。

- 贾晞儒(Jiǎ Xīrú) (1991) 「青海汉语与少数民族语言」『民族语文』1991(5): 5-12.
- (2006) 「语言接触中的汉语青海方言词」『青海民族学院学报(社会科学版)』2006(2): 108-113.
- 京都山の会出版部 (1992) 『アムド山旅』京都: ナカニシヤ出版.
- 川澄哲也 (2006) 「漢語西寧方言の声調 -声調体系、および連読変調に関する考察-」『東ユーラシア言語研究』第1集: 92-116. 東京: 好文出版.
- Lee-Smith, Mei W. & Wurm Stephen A. (1996) The Wutun language. In: Wurm, Stephen A. & Mühlhäusler, Peter & Tryon, Darrell T. (eds.) *Atlas of languages of intercultural communication in the Pacific, Asia, and the Americas*: 883-897. Berlin: Mouton de Gruyter.
- 李臣玲(Lǐ Chénlíng) (2005) 『青海民族教育近代化的困境与选择』北京: 民族出版社.
- 李克郁(Lǐ Kèyù) (1993a) 「析青海汉语中的让动形式“给”」『青海民族学院学报(社会科学版)』1993(4): 18-24.
- (1993b) 『土族(蒙古尔)源流考』西宁: 青海人民出版社.
- 李克郁(Lǐ Kèyù)・李美玲(Lǐ Měilíng) (2005) 『河湟蒙古尔人』西宁: 青海人民出版社.
- 吕建福(Lǚ Jiànfú) (2002) 『土族史』北京: 中国社会科学出版社.
- 牟一之(Mǐ Yīzhī)(主編) (2005) 『西宁历史与文化』沈阳: 辽宁民族出版社.
- 敏生智(Mǐn Shēngzhì) (1989) 「汉语青海方言与藏语安多方言」『青海民族学院学报(社会科学版)』1989(3): 78-87.
- 秦永章(Qín Yǒngzhāng) (2005) 『甘宁青地区多民族格局形成史研究』北京: 民族出版社.
- Schram, Louis M. J. (1954) *The Monguors of the Kansu-Tibetan Frontier. Their origin, history, and social organization.*(Transactions of the American Philosophical Society. New Series-vol.44, part 1)
- 庄司博史 (2003) 「土族語はなぜ残ったか -青海土(トゥー)族の漢化と母語維持」塚田誠之(編著)『民族の移動と文化の動態 中国周辺地域の歴史と現在』: 343-417. 東京: 風響社.
- Thomason, Salah G. (2001) *Language Contact. An Introduction.* Washington, D.C.: Georgetown University Press.
- Thomason, Salah G. and Terrence Kaufman. (1988) *Language Contact, Creolization, and Genetic Linguistics.* Berkeley: University of California Press.
- 王昱(Wáng Yù)・聰喆(Cōng Zhé)(主編) (1992) 『青海簡史』西宁: 青海人民出版社.

- 谢佐(Xiè Zuǒ)(主編)(2001)『青海民族关系史』西宁:青海民族出版社.
意西微萨·阿错(Yìxīwēisà·Ācuò)(2004)『倒话研究』北京:民族出版社.
照那斯图(Zhàonàsītú)(編著)(1981)『土族语简志』北京:民族出版社.

On the Formative Process of the Xining Dialect of Chinese

KAWASUMI Tetsuya
(Kobe City University of Foreign Studies)

Abstract

Xining(西宁), the capital of Qinghai(青海) province, is located in the Qinghai-Gansu(甘肃) border area. This region constitutes one of the most ethnically and linguistically diverse in all of China. Therefore the Chinese dialect of Xining manifests a number of non-Sinitic features. For example, the dialect has SOV word order, just like that of the neighboring minority languages, but unlike the usual SVO word order found in other Chinese dialects.

In this paper, we examine the formative process of the Xining dialect. The main conclusions are as follows:

1. The non-Sinitic features in the Xining dialect are likely to be the result of an “interference through shift” scenario.
2. The community that shifted to using Chinese was Monguor-speaking.
3. The shift occurred during the Qing(清) dynasty.